書　評

渡辺則文編　産業の発達と地域社会—瀬戸内産業史の研究—：溪水社，1982年，A5判490頁，8,000円

本書は，『産業の発達と地域社会の変貌に関する史的研究—瀬戸内海地域を中心として—』と題した共同研究を中心とする成果の一部である。また本書は，すでに刊行されている後藤陽一編『瀬戸内海地域の史的展開』（福武書店・1978年）に続く，広島近世史研究会の「研究論集」第2輯の性格を有するものでもある。研究の目的は，わが国産業発達史の中での，瀬戸内海地域に展開した産業の歴史的位置づけを，歴史的諸契機・地理的環境などとの関連で考察し，地域社会発展へのその影響を総合的に究明することだという。その分析は次の3点に焦点をあてている。第1点は瀬戸内海地域の特産物を中心とした主要産業の展開過程の個別具体的分析，第2点は諸産業技術の発達とその伝播過程の歴史的諸契機の解明，そして第3点は産業発達による地域社会構造への影響と，地域社会の変貌・発展へ与えた産業の規定性とを解明することである。

内容は大きく3つに分けられている。それは，Ⅰ生産と流通，Ⅱ産業の発達と権力，Ⅲ産業と地域社会であり，計17篇の論文から成っている。寄稿された後に分類されたもののようで，各章の題目とうまく一致し難いものもあるが，これはこの方式の論文集では致し方のないところであって，なんら個別論文の価値を損うものではない。研究対象時期は戦国期から現代にまで及んでいるが，その中心は近世である。以下個別に各論文の紹介を行うことにする。

高橋啓「近世後期吉野川流域の葉藍生産」は，阿波藍業の動向についてその生産過程や経営の面からアプローチしたもの。18世紀以降の本格的な藍作の展開の実態と，藍作をめぐる農民諸階層と藩による収奪体制の再編強化を跡づけ，藍作展開に伴う農村の荒廃・農民層分解の進行が，むしろ藍作地帯での人口漸増を結果させたという指摘はおもしろい。

泉康弘「瀬戸内海水運による阿波藍の流通—山西庄五郎家の廻船活動を中心に—」は，一廻船問屋（塩及び肥料問屋を兼業）の廻船活動を中心に瀬戸内海水運における廻船活動を明確にし，阿波特産品の移出と金肥・他国米移入による商品流通，その結果として生ずる問屋と藍作・甘蔗作地帯との密接な関係について論究し，瀬戸内海水運による阿波藍流通の特色を究明したもの。

三宅紹宣「幕末期長州藩における綿織物の生産形態」は，従来の長州綿織物生産の論議が織出高を中心としていた点を批判し，生産形態分析を導入し幕末期長州藩の綿織物の生産形態について，木綿織出の実態・原料綿の移入，さらに製品の集荷等の諸過程の総合的解明を試みたもの。氏は幕末期長州藩の綿織物の生産の支配的形態として，綿替制による農間余業として営まれた問屋制家内工業の段階であると結論づけ，ブルジョア性を低く評価する古島・岡説を支持している。

岡俊二「幕末・維新期泉南地方における一製糖業経営の動向」は，一次的史料に基づき幕末期の製糖業経営の動向を論じたもの。純粋にブルジョア化しえていない泉南製糖業の生産者的性格の保持と，自ら仲買化することなく大砂糖仲買商へ従属的に連携する側面と，泉南地域の広範な甘蔗作・製糖農民との取引関係や，彼らへの経済的影響力等の側面とを明らかにしている。

相良英輔「近代における塩の流通機構—赤穂塩田を対象にして—」は，製塩業の先進地域でありながら，塩の生産力が塩田立地（土砂と淡水の流入に悩まされる浅海の入江）に大きく制約され，生産力の低い塩田としての宿命を近代以降も背負うこととなった赤穂塩田について，沖売・岡売とよばれる2つの塩の流通形態や，近代以降の有力塩問屋の塩田集積や，地主資本を背景とした問屋業の一層の発展から分析したもの。分析の中心は後半の部分にあるといってよかろう。

秋山伸隆「戦国大名毛利氏の流通支配の性格」は，戦国大名の流通支配研究における西国大名研究の乏しさからスタートし，戦国期における領国内部の市場構造の割拠性（国人領主の領域内分業体制の編成による流通機構の掌握）説の虚構性を指摘し，中世後期中国地方では，畿内と地方との間の分業関係と地方港湾都市と周辺農村との間の分業関係が，水運によって結合していたことを明らかにしたもの。分析視点として都市支配，交通支配，商人・職人支配を設定している。

土井作治「広島藩営鉄山の成立とその構造」は，例の少ない鉄山の藩営化過程，経営形態，製鉄技術，

労働組織，流通機構などのしくみとその特質の解明を試みたもの。広島藩の鉄山支配は，生産から販売に至る全過程に及んでいたが，生産過程の中では鍛冶屋部門に比重をおき鑪・鉄穴流しの順で掌握度は低かった。最後に百姓経営鉄山との比較を通して藩営の特徴を明らかにしており，藩営鉄山の全貌を知ることができよう。

小川国治「長州藩経済政策と山代請紙制」は，長州藩の経済政策で重要な位置を占めていた請紙制が，藩財政の窮乏化とともに農民からの収奪を強め，遂には農民一揆を誘発し，結局再編成に追い込まれてゆく過程を明らかにしたもの。

谷山正道「化政期大和の『国訴』とその背景」は，従来の「国訴」研究がその経済的基礎の分析の不十分さ故に，いわば商品流通史としての「国訴」論に陥っていることを指摘し，大和の菜種「国訴」を題材として取り上げ，化政期の社会情勢や農村構造との密接な関連のもとに，この「国訴」を分析したもの。換言すれば，農村社会経済状況の地域差を踏まえた上でそれは論議されるべきであって，摂・河・泉を中心とした分析から即一般化されてきた従来の「国訴」論に対して，再検討を促すという点で貴重な労作である。

木原溥幸「讃岐高松藩における砂糖為替金」は，天保6年に始まる砂糖為替金の実態を明らかにしたもの。高松藩の砂糖統制は，四国では徳島藩の阿波藍と並ぶ代表的なものとされている。

三好昌文「宇和島藩における製蠟業と専売制」は，近世中期以降殖産興業として展開された製蠟業と藩専売制について，藩政改革の一環としての藩の唐櫨生産の奨励と，その大規模な青蠟の専売制の実態を通して解明したもの。

井上洋「幕末・維新期の鉱山政策と広島鉄山」は，広島藩の鉄山経営形態が，幕末・維新期において，郡鑪といった請負稼行への過渡的形態のほか民営も容認されるなど多様化し，それが維新政府による鉄山政策のもとでの，官営広島鉄山の成立へと至る過程を論じており，先の土井論文と対をなすもの。

日野綏彦「長州藩における貞享検地」は，検地帳から農民の階層構成を解明し，長州藩における本軒百姓・門男百姓の検地帳上の性格と，農民の階層分化が本百姓株の分割の形態をとって進展したことを論じたもの。長州藩の特異な藩政村構成・規模との関連でみてゆくことはできないであろうか。

道重哲男「近世山陽筋における林野の所持・利用の変化と村落」は，近世の山割が近代的林野所有・利用への過程にあるとする見解に対して，近世後期の林野の所持形態の展開は，必ずしも個別的私的林野への方向をとるものばかりでないことを指摘したもの。事例村にみられた山分けは，薪生産を中心とする林産物の商品化による肥料源としての野山の機能低下を，村落共同体的管理によって回復させることを目的としていたのである。

堤正信「在郷町と周辺村落」は，都市（在郷町）の基本的な存立基盤である周辺村落の変容を通して，中心地，さらには都市や産業の発達の意味の解明を試みたもの。谷田・疎塊村地域における小支谷の小村が，独自性と藩政村結合の脆弱さ・明治行政村の機能地域化などを基軸として，村落が都市の勢力圏に繰り込まれることによって，逆にその都市を利用しながら自己保存をはかるという新しい視点を提示している点で興味深い。

川崎茂「瀬戸内における三菱の鉱山業進出と地域社会—明治前期の吉岡鉱山を中心として—」は，住友とともに瀬戸内地方に君臨する鉱業資本の双璧たる三菱の吉岡鉱山経営やその近代化への過程，さらには周辺小規模鉱山の買収による独占化の歩みを解明したもの。また吉岡鉱山研究は，明治以後の三菱鉱業資本の，空間的展開考察上の原点としての意義をもっている。

千田武志「昭和恐慌期の化学繊維工業と工業立地—帝人第四工場の建設を中心として—」は，資本進出と国家（地方自治体）の密接な関係を歴史的に位置づけたもの。事例では，工場建設が資本の主導性のもとに，自治体がそれに協力するという形で実現されたことを述べている。

以上が収録論文17篇の概容である。編者は「一般に産業史を取り扱うさい，産業そのものの発展をみていくことも重要であるが，わたくしはかねがね一つの地域社会において，産業を中心に，展開する政治・社会・経済・文化等の諸相との関連において構成史的に把握していきたいと考えている。それが産業史を通して地域史にアプローチする道でもあり，また，新たな産業史を構築することにつながるものと思われる」と述べている。収録論文のほとんどが，瀬戸内海を代表する産業を取扱ってはいるが，その方法は多様である。つまり各論文は，おそらく各研究者のそれぞれの研究視角ないし研究の延長線上に

おいて書かれていると思われるからである。産業史にもさまざまなスタイルがあると思われるが，編者の立場に立てば各論文がその目的を十分に果しているとは言い難い。しかし，そのための具体的作業としては大変意義深いものがあるといえよう。産業史は，歴史地理学にとってもきわめて関係が深い。今後これら専門分野・研究分野の異なる研究者間の討論によって，地方史研究がより一層進展することを祈りたい。

（岩崎公弥・愛知教育大）